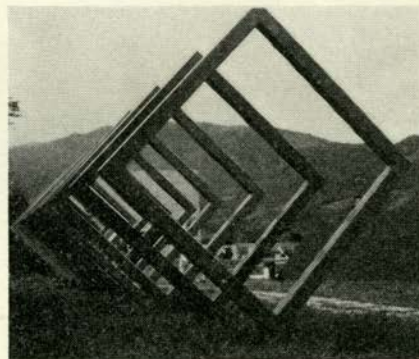


# 随想三題



「Cosmical Colour Space」  
第一回現代彫刻展コンクール賞受賞作品  
松原成夫 作

風

宮田恭子

△詩人▽



未来に対する欲望かまた思い出への愛憎  
が「地球」という巨大な頭蓋骨のどこかに  
目ざめたとき、風が起る

サン＝ポール・ルー

私のよく坐る窓べのところに一  
本の青桐があります。その窓いっ  
ぱいにひろがるうだるような真夏  
の空間に桐はその大きい葉を何枚  
も繁らせて、そこだけやさしい緑  
色の影をつくり、そしてその間か

らホーシツクツクホーシツクツク  
と威勢のよい蟬の声を一日中ひび  
かせているのです。すべてがはじ  
けるような眩しい夏です。

けれど、甲子園の全国高校野球  
大会も終わったきようこの頃、この  
桐の葉をわたって涼しい風が吹い  
てくるのが感じられるようになり  
ました。

この風、夏がすでに逝きつつあ  
り、きたるべき新しい季節の到来  
を予兆するこの風に、私はいつも  
フランスの詩人ポール・ヴァレリ  
ーの「魅惑」(詩集)の中の「海辺  
の墓地」(Le Cimetière marin)  
を思い出すのです。

地中海に面した南仏の、小さな  
入江を抱いて斜面が海に迫ってお  
り、海と空と光にみちあふれた海  
市セーフトに生れたヴァレリーは、

「私は自分が生れることが望まし  
かったような場所に生れた」と後  
年語っているように海辺のある故  
郷へのつよい愛を明らかにしてい  
ます。「海辺の墓地」もおそらく、  
ヴァレリーの生れ故郷セーフトの海  
辺の砂丘をその場所としたのだろ  
うといわれています。

ヴァレリーはマラルメの系譜を  
うけつぐフランス象徴主義の正統  
派です。マラルメの「音楽の富を  
文学に奪還する」ことを至上のも  
のとし、それは内心のどんなトリ  
ヴィアルな劇でさえも物質化し、  
さらに量や質さえ越えて非情な意  
志的操作の後、音符のごとく扱  
う「関係の詩」であるといわれます  
けれどもそれに耐えぬいた彼の詩  
は、認識方法を異にする同時代の  
生哲学者ベルグソン(生命の飛  
躍)を高らかに歌うものであり、ま  
さに音楽の富、生命の流露実在を  
うたいあげているのです。

「海辺の墓地」には最後の一節  
に、有名な「風立ちぬ、いざ生き  
めやも」の句が見られます。私の  
好きな後半の詩句を少し書きうつ  
してみたいと思います。

『否、否！立て！あいつぐ時の  
なかに

破れ、わが肉体よ、その想いに  
沈む姿を吸いこめわが胸よ、  
風の誕生を！

さわやかな大気、

海より吹きあがり

わたしに わが魂を返す……

おお塩の香にみちた力よ!

波に走り寄ろう

生き生きと進しるために

……

風が立つ!……今こそ生きねば

ならぬ!

大気は わたしの本を開き

また閉ざす

波は しぶきに碎け

岩々から進しる!

飛べ、目くるめく 本の頁よ!

破れ、波よ!

よろこびの水で破れ

白い帆の すなごる

この静かな屋根を

俺と

あいつ

松原 成夫

△造形作家△



前置きしておくが、「あいつ」とは自分の作品のことである。

展覧会があるたびにいつも感じることなのだが、事前にあいつを送り、開会後初めて会場であいつを見た時、一瞬、いいしれない複

雑な気持になる。あいつのために四苦八苦して集めた費用、締切日の一週間前からほとんど徹夜の状態を続け、汗水たらした苦労を無視し、あいつは澄ました顔で美術館や野外展示場に、腰をデンとすえ冷たい視線で俺を見る。その時、無償に腹立たしくなり「主人はこの俺なのだ!」と叫びながらあいつの頭をボカボカ殴りたい衝動にかられる。その上、多くの人々から賞讃を受けたり、ジャーナリズムに載ったりしたらよい高慢な態度になるから始末がわるい。あんなやつのために、日常生活を犠牲にしてまで何故、浪費しなければならぬのか!展覧会が終ればあいつは、何の役にもたない屑と同じじゃないか!俺だって若いんだ、人並の生活もしたいさ。憎いあん畜生め!あいつを見つめる俺の心は苛立たしさで一杯なのだ。

その反面、あいつを誉めてやりたい時もある。あいつが、野外にあって自然や観者と対話している時だ。あいつ自身、性質上独立したものではなく、外界の空気、風、緑の木々等、野外の空間、野外の自然に浸透してこそあいつ自身ができあがるのである。さわやかな朝の空気、日中の激しい太陽、はるか彼方の空を真紅に染める夕やけ、そして夕闇にスポット

ライトで浮ぶロマンチックな光、これら自然の変化や人工の効果によって、あいつは盛り上がり、雨や嵐に耐え忍ぶ姿に、あいつの真の力強さを見い出す。そして今度は、あいつの頭を撫でてやりたくなるのだ。

現代美術において、作家と物質(素材)をストレートにスパークさせるため、その間の、あいまいな感情等、すべての雑物を排除するという概念がある。俺の制作思考もそうであり、いわゆる発注の方法をとり、プロジェクトの段階で、俺のあいつは決定される。しかし、たとえコンピュータや、優れたエンジニアを使って工業生産されたものでも、やはり愛着は感じるものだ。かつて彫刻家が、石や木に毎日コツコツとノミを使いながら作家の人間性を除々に彫り刻むというようなコミュニケーションは、俺とあいつの間にはもちろんない。しかしそれ以上のより現代的な、あるいは未来的な計画にもとづき、新たな実感が、俺とあいつの間に生まれる。おそらく、この関係は、表現方法や性質は変わるとしても永遠に続くだろう。あいつを生み出す行為によって、そのたびに、心を整理し緊張した気持を得られるし、たとえばずかの緊張であっても、それがあ

る限り、自分を見失わず、人生



の意義を認め、真の人間性を見窮めることができるのである。だから今日も、愛憎を相互に感じながらも、彼を生まんがため、綿密な計算と細心の神経を費そうとしてゐる。

## サンテレビだけの話

神栄 赴 郷

△サンテレビ広報課長△



産ぶ声をあげて早や五カ月が過ぎた。俗に五月生まれの児は育てやすい——といわれるように、サンテレビも、まずは順調に目鼻形ととのって、それらしくなり、神戸、姫路、大阪などの視聴者の皆さんにいつくしまれてすすく發育してきた。

しかし、隣接の大阪には十才も年上のV局が四人(?)もいて、この児(サンテレビ)とて生きることの難しさを十二分に味わっているのもまた事実である。そうした苦労話も捨てがたいが、それより發育途上のエピソードを披露するのも一興かと思う。

先月末まで、自社制作の看板番

組はやはり「サンテレビホール」と「ナイター実況中継」。「STホール」には延べ二千四百人もの視聴者が出演し、65回をもって一応幕を閉じた。その司会者のなかで、スタジオ見学に訪れる子供たちや中学生の人気の的はなんといつてもうつみどりさんだった。子供好きに加えて扱い方がうまい。気さくな親しみやすさは抜群。ある時、彼女が見学の女子中学生に

「あなたのスカート少し長すぎるんじゃない、この位でいいわよ」手でスカートの裾から二十センチ上を示していつている。

「でも、これが制服なんです」恥づかしそうにその生徒は答えていた。

ところが一週間後、同じ生徒が流行のスカーフ、超ミニスカートで再び見学にあらわれた。

サイン帳をさしだされたうつみどりさん、女子中学生の一変ぶりに大きな目をパチクリパチクリ……。

彼女の特技は忘れものだということが、サンテレビの更衣室に、なんとミニスカートを忘れて帰ったのがゲスト出演した倍賞美津子さん。いや、これはここだけの話にして頂きたいが、忘れたミニ(たしかキュロット・スカート)を、よせばいいのにスタッフ五、六人

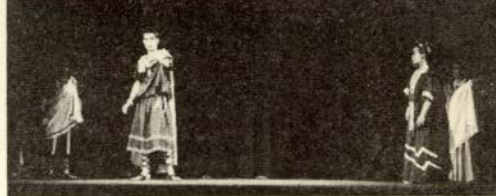
がさっそくはいてみた。かなりイイ線いつているスタジオ・カメラ担当のTちゃんでもブカブカ、H92という彼女のサイズにあらためてびっくりした次第。(倍賞さんゴメンナサイ)

忘れものと異って、温厚、誠実、律義さでは金曜日に出演していた荻昌弘氏の右に出る人はまずあるまい。クイズの司会にあたって、一問、一問、正解は百科事典で確認しておかれた。また「一円貨とハガキ一枚とではどちらが重いかな?」この場合は、総務部で借りてきたハカリでもって実験を試みながら本番入りするといった具合。本職の映画評論と同様に人柄のにじみでた司会だった。

さて、サンテレビ誕生と共に一躍スポーツライートを浴びたのが、野球解説のチコ(バルボン)さんだ。スポーツ紙はもちろん、週刊誌のインタビュ、他局へのゲスト出演と大忙し。文字通り異色タレントに相成った。甲子園の放送席では、試合終了後、ファンにとりまかれ頭をなでられることもしきり。特に阪神が勝ったときはなおさらだった。

かくしてナイターもシーズンオフに入った。番組も十月新編成でスタート、より暖い眼でサンテレビの生育を見守ってやって下さい。

■ある集い その足あと  
劇団テアトロ・パン



るテアトロ・パンは、二十年の歴史を感じさせないほどの現在性を持っている。

二十年前、正確に言えば十九年前というべきだが、神戸高校の第三回卒業生である牧慎三氏が、当時の神戸高校演劇部を母胎に劇団を創立する。その故が、現劇団員二十人の三分の二が神戸高校卒業生で占めるという特異な存在だ。

テアトロ・パン。ころよい響きを持つ言葉だ。腰から下が山羊上半身が人間、顔は獅子鼻で二角獣。音楽舞踏を愛し、山野を草笛を吹き、いたずらをし戯れる。これがギリシャの牧羊神・パンの姿である。これはさしずめ、牧慎三氏を頭とするテアトロ・パンの構成をもあらわしているように思えるから不思議だ。

劇団テアトロ・パン創立当時より劇団文芸部に活躍され、当時立命館大学助教授、故福島教和氏が劇団十周年に与えた言葉がある。

それはアマチュア演劇運動の三つの主要目的として、第一にこの社会に於て芸術及び教育的精神的感化力としての演劇を保存するために開演すること。第二に我が国の青少年の情操が日増に萎えていくのを、なんらかの方法で中和するために自己活動と創造的な仕事の機会を供すること、第三に劇場側の人達も観客側の人達も均しく一堂に会って交際のチャンスを与

え、その結果、日常生活と経験とを豊かにするような社会的中心を創り出すことである。以上の三つを挙げるが、創立当初より十年間約二十回にわたって森本薫の戯曲に取り組んできた姿勢は、芸術の美、演劇の美を追究してきた時代を背景にしているが、以後今日までの十年間は、アーサー・ローレンツの「旅情」を始め、J・P・サルトルの「恭々しき娼婦」、ラシーヌの「ブリタニキユス」他二篇と、それは観客に問題を提起する時代に入った。そして恐らく、これが二十周年記念公演での「旅情」の再演で、時代を強烈に意識する新人を迎えて総結果されることであろう。その結果、この舞台を通して次にきたるべき十年の針路が感じられると思うと興味深い。

人生と舞台は、二度と再び戻ってこない、と名言を吐く時、そこに潜むものは厳しいまでの歴史との同時性である。人間の透明な魂まごころ、考える力でもって、精神的対象を「意識」し、「認識」し、「選択」し、心の中に大きくふくらませる。このことが個人の演劇人としての芸術の純度であり、それ故にのみ、観客に同時性を強いるのである。

△劇団事務所連絡先▽

神戸市 黄区 琴緒町四の七甲栄ビル内  
奥原衛科

今日の大衆が、そこに振り向き限り、演劇はそこにあるのであり、それを更に純粹に振り向けさせ、高め得るのが我々アマチュアである、と自負している劇団テアトロ・パンは、この十月二十六日、牧創作舞踏研究所との合同公演を国際会館大ホールでもつ。

ブロードウェイで、八カ月もロングランを続けたアーサー・ローレンツ作「旅情」の舞台は、演劇芸術は観客に「うけ」なければ、何の意味も持ち得まい、といいきる牧慎三氏の演出によるものだ。

演劇との出会いが非常に現在の種々の場を持っているにしても十年以上の経験者と、私と、観客はまったく同じ目である、という非常に冷酷な、また自由な世界が、そこに生じる、とまで新人に語らせ



パリの味!

# ヒロタの マロングラッセ



姿といい、味、色艶にフランス菓子の  
優雅な華麗さをそのままお伝えます。

## 洋菓子の ヒロタ

元町店 三宮店 さんちか店 そごう店  
33-2340 32-1227 39-3474 22-4181代



より高い精度を  
実現した  
高振動自動巻腕時計  
“ロンジン・ウルトラクロン”



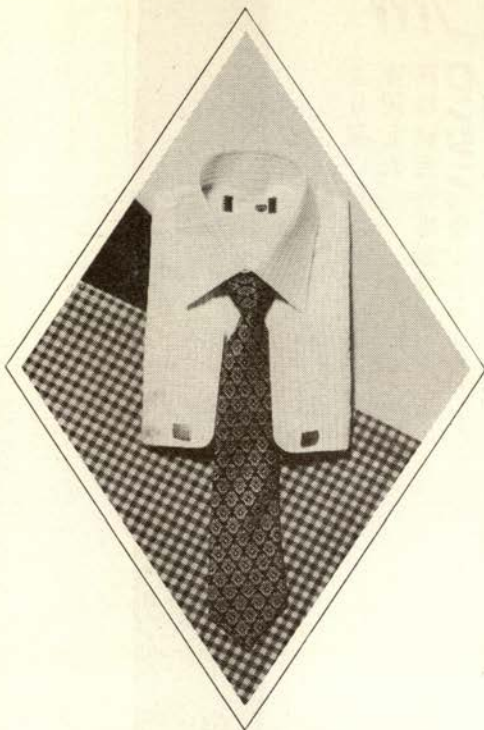
特約店



## 美甲時計店

元町店・元町三丁目 TEL33-1798  
三宮店・さんちがファンシー・タウン TEL33-8798

KOBE  SHIRT



よろず御機衣縫上処

## 神戸シャツ

神戸店ー神戸大丸前 33-2168  
 東京店ー東急・日本橋店1階 211-0511内線219  
 東急・渋谷本店6階 462-3433  
 広島店ー広島・福屋1階 47-6111内線333

秋



秋に一番おいしいものは、  
それはあなたの

ファンシー  
チョコレート



¥ 1,000 ¥ 700 ¥ 500

チョコレート\*キャンデー

## ゴンチャロフ

本社 神戸市生田区加納町4の1 TEL 39-2636  
 直売店 さんちか・スイーツタウン TEL 39-3563



□れんさいずいそう V

# 六甲山哀愁

林田重五郎／随筆家・写真も V



六甲のアジサイは下界より数段美しい

人間、やりたくても、どうしても実行できないことがあるものである。六甲山のゴルフ場でゴルフをしたい——このわたしの願いは、永久に果たせそうもない。日本最古の名門ゴルフ場である。ビジターには有力な紹介者が必要だと聞いている。西村旅館の西村貫一さんが、ご健在だったら、お願いして、望みを果たせたかも知れない。しかし、いまでは空しいことである。

この十数年来、毎夏、一夜を十数人の仲間と山上で明かす決まりになっている。四人一組で卓を囲む会であるが、そのとき、六甲のゴルフ場の横を通る。いつも、ここでクラブを振る日は来ないのかと、長嘆することになっている。

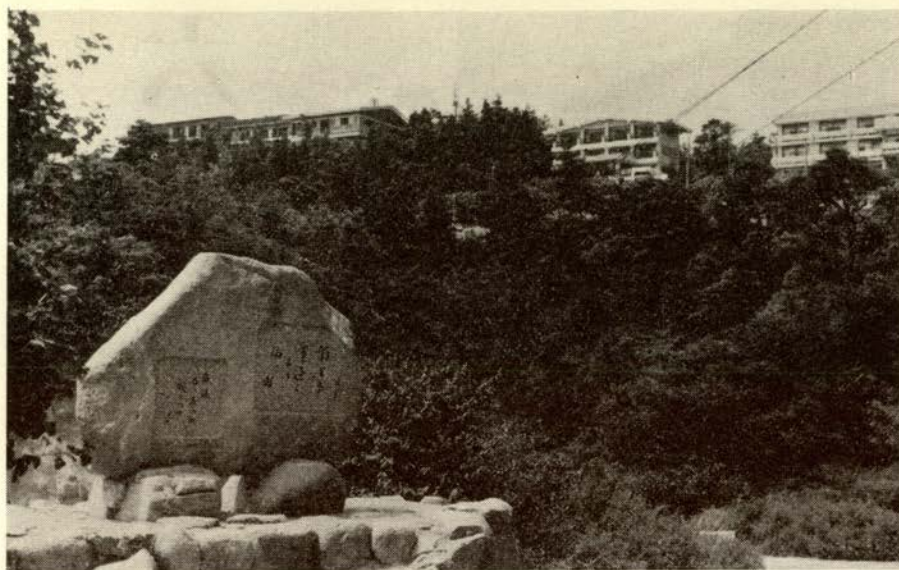


昭和十一年八月というから、もう三十年以上も前のことである。小林一三さんのお話を聞くため六甲山ホテルへ行った。もちろん増築前の、山小屋の感じのホテル時代である。

その月の五日の夕方、小林さんはホテルの部屋で盗難にあい、二百十円の現金やパスなど盗まれた。

「世間ではわたしをスゴイ男のようにいうが、この通り、のんびりしたマの抜けた人間だよ」  
 そういつてニコニコしておられた。請うままに夫人と居合せた茶の宗匠と三人で、当時山上にあった「かわらけ投げ」に興じて、写真部員に写真を撮らせてもらった記憶がある。

谷間へ、かわらけを投げるこの遊びも、いつの間にか消えてしまった。もっとも今ののように家が



句碑のバックに鉄筋の寮の建物が並ぶ

殖え、登山者が満員では、谷に向かってかわらけを投げるのも、危険きわまりないであろう。一枚一銭であったか、二銭であったか、のどかな遊びではあった。



同じ年の九月、神戸の財界人を訪問するつづきものを取材して回った。川重の鋳谷さんのように「三万の同志が鉄と取り組んでいるのに、社長のわたしが避暑などできるものか」と下界でがんばる人もあったが、有力者は夏は六甲山の別荘で過ごしたものである。クーラーがなかった当時だから、山上の涼しさは、現在に比べて何十倍もの値打ちがあった。

秋の始めだったが、なお山に残っている人も多く、訪問の記録を調べると、三人に六甲山上でお目にかかっている。

日毛の川西清兵衛さん、三国岩の下に、主建築と離れて、四坪のワラ葺きのいおりを作って住んでおられた。茶室のにじり口から訪れて、茶を一服ご馳走になった。カマの前で――

「なんでも、自然のままが好きだ。この花は鯛釣草という高山植物だ。六甲では雑草だが美しいだろう。」

白色のなかにルビー色が見える。床の花いけの中の可憐な花だった。

岡崎忠雄さんも山上でお目にかかった。大正五年以来の六甲愛好者で、六月早々から九月中ごろまで山上生活。なんでも中国の戦国時代の本が面白くてたまらぬとのことであった。あじさいの庭に立たれた姿を思い出す。

もう一人は松岡潤吉さん、折から霧が吹き上





建物のない六甲風景を撮るには、探しまわらねばならぬ〈六甲オリエンタルホテルより〉

たトンカツ屋の出現がニュースになっている。出前はタクシーでしたとある。ジンギスカン鍋大流行の現在を思うと面白い。

ケーブルのほかにロープウェイもあったが、やはり金持の避暑の空気が全山をおおっていた中国の廬山がそうであったように。

いまはどうだろう。鉄筋鉄骨コンクリートの建物が全山を埋めている。会社の寮が多いそうだ。山上はもうギッシリ満員で、適当な土地を探しても見つからぬとの話を何年も前に聞いたマイカー族もたくさん上る。オリエンタルホテル前の、小石の多い駐車場の駐車料が一回で二百円とある。昔なら、どこにでも車を止められたのに、この値段とは山上満員の象徴であろう。

開発される六甲山、緑が少なくなるのは残念だが、三十年前、一部の金持ちだけの六甲山であったのが、いま大衆のもの、だれでも上って泊って、涼を取って、夜景を楽しめる六甲になったのは、なんといいても明らかである。

だれでもがゴルフをやる日は、まだまだ遠い未来であるにしても……

◇  
げてきたが、邸内のグリーンの上で、ドライバークラブをビュンビュン振って、ゴルフ講義を聞かせてもらった。

◇  
そのころの六甲は、いまから言えば、夏でもひっそりしたものだった。枝折戸と小道が申し合わせたようにある富豪の別荘数十軒が主な建物、ほかには夏だけテント村があった。野っ原に幕をはっ

◇  
やがて冬、冬の六甲がまた近年大賑いである。スケート、それに雪でも降ればケーブルはピストン運転だ。山上で冬を過ごす寮の管理人と子弟にとっては湿気と生鮮食品の少ないことで、つらいことではあるが、六甲が夏だけではなくたことは、やがて山上の人にもプラスになりそうである。

□随想□

# 神戸に住みたい

大久保 恒次

え・津 高 和 一



兵庫の貝弥の蒲鉾、元町の青辰の穴子鮓、中山手のフロインドリーブのパンと菓子、トアロード・デリカテッセンの西洋乾物。これみな竹中郁さんに教えてもらった逸品だが、こんなまっとうな物が、今ときよくも作られ、売られていることに、感嘆する。

蒲鉾を練成品という。レンセイヒンとよぶからには、大量つくって、どっと全国に売る。防腐剤その他で、日保ちだけは保証されている。作った地元で、こんなのを食わされてはたまったものではない。ネット（腐りかけ）のくるのを薬で防ぐのはいいだろうが、一体なにが原料なのか、いづれ

は人造肉をつかうというが、今のところは魚市場へ仕入れにゆかなくていいことになっている。大手の漁業会社が、冷凍スリ身に手をつけて能率もあがって、それが蒲鉾の原料である。ただしこのスリ身プラスXのもあって、いささか良心的なのもあるにはある。デパートでときどきスリ身の宣伝販売をしているのは、このスリ身のあまりである。

貝住弥兵衛さんはいう、  
「一番うまいのは磯の小魚でつくったものでん  
な。むかしはそんな蒲鉾もありました」と。  
今はよんどころなく鰯。卵白、塩、酒味淋、た



だそれだけ。この鰯がなくなったらば、貝弥は蒲鉾をつくらなくなるだろう。

青辰もまた穴子がなくなったら鰯をつくらないだろう。大阪には、ひょうたん家・鰯萬と二軒の小鯛館があるが、鰯は鰯・穴子よりもはやく減りつつある。ほんとに瀬戸内であつたのは、珍貴の扱いをうけて、羽尾がはえて、航空便で浪費都市東京へ飛んでゆく。今の鰯は、われわれが九州へ旅して、博多あたりで食って、外海のやつはどことなく大味だ、といったその鰯。船の新式生簀で、広島へんまで運んできて、水揚げしている。これをしも瀬戸内の鰯としとかないと、あまりに淋しい。こういう点でも、鰯も穴子もとくに、外海のもまじるのは、致し方なからう。これも竹中郁さんの話に、兵庫の魚善が、季節にはもっぱら穴子料理をしたそうだが、堺市にも福斗（ふくと）という穴子料理があつて、ここのは若い頃食つて知っている。今も名物の高砂の焼穴子など、大阪湾から播磨灘へかけて、ちょうど最高の鰯の漁場と、穴子のそれとはダブつていたようだ。青辰のおやじさんは、

『大阪湾の穴子はよかつたでッセ』

という。

近ごろパンもいろいろできてきたし、ドイツ菓子も東から進出してきた。しかしフロインドリーブの棒パン、チーズケーキにまさるのではないと定評ができている。吉田健一先生が、どこかできこし召して、フロインドリーブの棒パンをさげて、香ばしい匂いをかきながら、それをちぎって食べ、元町を蹣跚している図など、神戸なればこそである。わたくしはチーズケーキに目がなくて、東京へでも、良いというのは買って食べる。大阪にもある

にはあるし、たのめば焼いてもくれる。しかしそのどれも、一個丸ごと食べられるのはなかつた。

ところがフロインドリーブのなら、大型一つ、紅茶一碗でらくに平らげて、舌鼓をうつ。甘くなく、チーズの味がいきっていて、うまいからである。中央が回んでいるが、実はそこがうまいのである。

西洋乾物のデリカテッセン。うまさうな物が、いろいろ一ぱいあるので、目うつりがする。ことにスモークサーモンは、ここの女主人の手づくりで、立派な炬を持っている。スモークサーモンは東京でいくらでも求められたが、キャビア、フォアグラほどに高価であつて、ほんの少ししか手にできなかった。ところがデリカでは良いのが値ごろでわれらにもなじめる物となつた。近年大みそかに店の前へ行列ができるのは、ふりの客ではなくて、みな予約したいろいろの物をとりにきているのだ。五、六年前の大阪の二、三の蒲鉾屋でこんなを見たものだが、去年はもうそんなのは見られなくなつた。お正月のためのオセチの保存食は、今では西洋乾物にうつりかわつてきたのであらう。

ほんとの蒲鉾、うまい穴子鰯、パンとケーキ、あやしくない西洋乾物。いずれも決して贅沢なんかではない。われらには分相應の日常の食べ物である。京大阪のよろしい物は、戦後このかた、がたがたとくずれ去つて、ほんの僅かしか残っていない。京大阪・奈良と居を移して住んだが、僅かしかないあの生活で、面白い本と、うまい物にしか生甲斐がなくなつてしまい、臍をかんて思うには、もう一とまわり若かつたら、神戸のかたすみに、割り込ませてもらいたい。と。△随筆家▽

□随想□

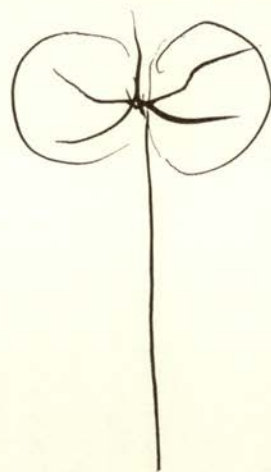
# 小庭小事

白川 渥

え・津 高一

いつからか、明け方のひと時を惜しむ妙なくせがついてしまった。朝の小用を足したあと、まだ白々明けの濡れ縁に這い出して、そこで小一時間も無為の時間を過してから、また寢床にもぐり込むといったあんばいである。前夜おそくなった時など、頭の中にはまだたっぷり睡気がある。何やら水中に居る心地だが、それでもそんな半透明の意識で、しばらく私だけの時間を持つ。

裏庭にささやかな竹林があって、それが隣家との垣根の用になっている。ほてい竹というのである。根元に節の多い、釣竿用のアレだが、時として、その小藪の暗がりにどこかの猫がひそんでいて、眼玉をギラつかせる。息を殺して、妙な伍人と対峙している風なのだが、こちらは頓着なく



あ

タバコに火をつけて、この味爽のひと時の静謐を珍重する。

眼前の鉄平石のテラスの側にも、一株のほてい竹がある。藪の地下茎がここまで伸びてきたもので、鋏を入れて丈けを詰め、枝を間引いているうちに、ちょっとした盆栽の恰好になった。よく視ると、どの葉末も微光を放っている。けし粒ほどのかすかな露だが、ダイヤのように鋭い光だ。その葉が少こし風に揺れてきても、夜はまだ明けきっていない。街も人も樹々たちもただ蒼々と眠っている。

一日二十四時間のうちに、いや、この人生の時間に、こんな清澄な時の推移があったことを、いまさら惜しまざるを得ない。



# 竹影払階塵不動

とは好きな句だが、そういえば、姫路の初井しづ枝さんの歌にも、

踏む階の一段ごとに花びらの散り溜りゐて逝く時のあり

そんな佳詠がある。空間は見えても、時間は見えない。それが見えるということは、人生が見えるということであろうか。近頃の初井姉の歌境の深さに脱帽する。

○

夜明けの眼覚めは、齢のせいかもしれない。が、妙な癖の方は、居を階下の部屋に移したからであらう。

去年の暮、老母が他界してから、わが家はガラシとしてしまった。夫婦二人きりではどうしようもない手持ち不沙汰から、末娘夫婦を呼び寄せ、二階はそっくり彼らに提供し、われわれ夫婦は階下にと、家の中を少し模様変えしてみたわけだが、この裏の離れは、もともと老母のために建て増した隠居部屋。友人の棟梁の丹精で、ちよいとした茶室風にしつらえてある。

ここへわが果を移した当初は、ひどく勝手がちがった。だいいち、手挾である。これまでは二階の書斎で和洋両風の机を使ったりしていたが、ここでは碌に書物も持ち込めない。海が見えなくなつたということも、何やら佗しい。が、そんな違和感は当座のことではしなかった。小庭ながら、わが家ではこの部屋からの眺めが一番いいのである。移つたのは、今年初夏の頃だったが、すぐ手の届くところで、魚が泳ぎ、花は咲いた。裏木戸へ出る西の露地は、そこが風の通路になっている

らしく、冷房装置も無用なほどだ。先頃、淡州堂主人の山の家の完成を祝って、友人相寄り「莫愁居」の名を、献じた時、わが果にも「木風居」と洒落れてみた。池畔の楓の若紅葉が美しかったからである。

学問にあてしひと間や若葉風

「九年母」の植村氏の句だが、私もそんな意気込みで坐り直したもの。

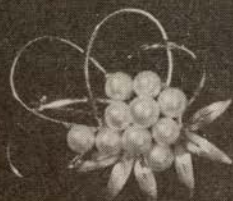
——もうこれ一篇で。俗筆を絶つ。

先年、新聞小説の仕事始めるに当たって、人にもわれにもそういいかせた。近頃、海音寺潮五郎氏も何やら同じ宣言をしているようだが、私の場合、ただ文学への郷愁からで、世俗への憤りといった大げさなものではない。

が、あれから半歳、「木風居」は留守勝ちの日が多い。机上の書物も、読みかけたまま放つたらかしの日がつづく。「三日書を読まざれば顔面に垢を生ず」とは王陽明の戒めだが、わが顔面は黒くなった。天高き秋を迎えて、いよいよ白川ならぬ黒川である「木風居」主人の吾流風（ゴルフ）熱は、まだまだ当分はつづくであらう。△作家▽



世界の人々に  
愛される  
キタムラパール



*Kitamura Pearls*

北村真珠店

元町通2丁目60 TEL 33-0072

お慶びの日に...

ウェディングケーキ  
デコレーションケーキ  
松竹梅引菓子  
紅 白 饅 頭



神戸にそだって 70年



月 月 堂

元町3丁目 TEL 33-2412~5

さんちがスイーツタウン TEL 33-3455





小泉徳一氏

■神戸っ子対談■

# 情報組織化の研究所を

小泉 徳一

△小泉製麻株式会社社長・神戸経済同友会代表幹事▽

編集部 情報産業という言葉は、最近とみに口にされる

ことですが、六年前に京都大学人文研の梅棹忠夫氏が、情報産業論を出されておられますし、また京都経済同友会が京都ビジョン研究委員会を設けて、情報産業時代における「豊かな京都への提言」をしている。そしてこれらが財界人の間に実にスムーズに入ってきています。このことを前提にして、情報産業時代の神戸はいかにある

柏井 健一

△柏井紙業株式会社社長・神戸経済同友会常任幹事▽

べきか、またそのために経済人は何をなすべきかを語っていただきたいと思います。

柏井 神戸においては、小泉さんに御尽力いただいたのですが、神戸経済同友会にビジョン委員会、神戸商工会議所に企画委員会を設けているのです。

小泉 神戸では商工貿易センターの竣工式に間に合わせるようにと、浅田会頭時代に話がありまして、それを企

画委員会に持ちこんだのです。そして同じやるなら神戸の経済人の総意が結集されることが望ましいので、本来ビジョン的色彩を持っている経済同友会と一緒にやろう

ということ、当時の代表幹事の岩武照彦（神戸製鋼）小西一夫（神戸銀行）に入っていたいただき、それで同友会のビジョン委員長を引受けたのです。ところがこのたび

経済同友会の代表幹事になりましたので、神戸のビジョンに無関心でありえない神戸銀行の石野信一頭取にビジ

ョン委員長をお願いして今日に到っているわけです。柏井 十一月の商工貿易センターの竣工式にまにあわず

というより、さらに充実させるためにもっと議論しあう必要があるという意見がありまして、目下議論をしてい

るところなのです。小泉 まず草案を企画委員会につくって、それを経済同

友会のビジョン委員会へ持ち込み、財界の方から広くご意見をいただいて、さらに練りあげて行くというプラン

はあるのですがなかなかまとまらない。神戸は開港時は全くの寒村で、それが急成長をとげたが最近はその成長

の度合いが鈍化している。これには環境条件の整備が非常に大きく影響しているのです。会社にとっては従業員

の質とかが問題になるが、それよりも環境条件の整備が重要になってきているのです。開港当時は、海上交通

が主だから先進の人が集まってくる。自然がその条件をつくっているのです。こういう条件があったからこそ、

川崎製鉄、川崎重工、神戸製鋼、日本毛織にしても、そういう環境整備条件の波に乗って出てきたのです。そ

れが戦後交通が非常に発達して、あちこちでスラム化が起こってきたし、大陸貿易の途絶によりアメリカ貿易が

中心になってきた。そういう条件を考える必要もある。また産業構造の変化にともなって、経済規模が大きくな

り、第一に広い土地がいる。柏井 石油化学にしても自動車にしても、今では百万坪

単位の土地が必要ですからね。

## ★日本経済の発展に、神戸を適合させる条件整備を

小泉 そうなると神戸のような背後地の狭いところでは

むしろ大企業は出て行かざるを得ない。これを考えると

今までのように、神戸の将来を見るとき、総生産高や商

品の出荷高をあげて行こうとするだけでは無理だと思

うのです。戦前においては、日本経済の発展に對して神戸

の占めるファンクションが非常に適合したから神戸は成

長し得たわけです。となると、今後の日本経済の発展に、

神戸の立地なり人口を適合させるための条件整備をどう

するか成功するかどうかがビジョンの骨子だと思

うです。柏井 情報ということに関しては、大阪、東京が絶対的

な管理中枢機能を持っています神戸はるか及ばない。と

ころが大正から昭和の初めにかけては、日本の海運市況

は神戸中心に動いてきています。海運市況に関する限りの

情報の管理中枢機能は神戸が持っていた。しかし、戦後

海運関係は軒並みに本社を東京へ移しているのです。果

して、神戸は現在の状況下で日本経済の中の情報の中心にはいれるような大きな要素はあるのだろうか。

小泉 情報ということが、本当に神戸の発展の決め手になるのだろうか、という点にまず問題を設定すべきでしょうね。確かに港湾は神戸で大きな比重を占めるが、全国的に見ると明治、大正の頃に比べてそのシェアは小さくなってきている。むしろ神戸港を整備拡張するというのではもはや限度に来ていて、これは大阪湾総合開発なり、瀬戸内経済の基地としての港湾の比重が高まる。しかし、港湾に関係する輸出入商社、食品産業、流通機構は今後発展するだろうか、港湾をテコにした神戸の発展も考えねばならない。

柏井 ただ神戸の場合、市街地は別として背後地に大きな可能性がありますね。西神、北神をベッドタウンにするのか、内陸工業地帯にするのか、またそれを西播工業地帯といかに結びつけるのか、これがその方向づけと条



件整備の中で大きなウエイトを占めている。

小泉　ところが、神戸の市街地が西神、北神、西播、東播の管理中枢機能をもつところとして適当かとなると、考えてみる問題が残されている。神戸が背後地工業または瀬戸内工業の輸送基地となったとしても、情報に関する管理中核都市として発展するかと必ずしもつながらないのではないだろうか。

柏井　そうですね。神戸の第四工区にしても各商社が店



氏一健井柏

京では情報の決定力を持っているものが多い。これが中枢管理機能の根幹なのです。それでは神戸には将来に人口が集積することはないのか、を考えることも管理中核機能を持てるかどうかで重要なことだと思います。それでは人を集めるための条件整備はなにかというと、これは居住性を良くするだけではない。一つは大学を良くする。それも研究機関と教育機関を分離させ、大学の附属研究所にこれからの産業の発達にマッチした研究をさせる。あるいは東南アジア開発にマッチした研究を研究所をつくる。そうすると自然に研究所ができ、外国からの研修者、学者がくる。そこで商社が本社を神戸に移す条件が育つ。こういうことは神戸では技術的に不可能ではないのです。この点で専門家の意見を拝聴して煮つめる必要があるのではないのでしょうか。都市の条件整備の狙いが確定しなければ折角の立地条件が生かされないのです。これだけ立派な港湾があり産業もある市域がベッドタウンになるとは到底考えられない。

柏井　神戸をショッピングセンターとして捉える場合でも、衣裳、センス、モードは今後の大きな情報です。情報そのものですね。

小泉　そういう情報を、ただ神戸で育った店だからで売るだけでなく、情報収集を科学的に行なう研究所などを先行すれば累積的に商品が良くなる。衣裳とか食品、住宅に関しては、神戸がそれらの情報の管理中核になりうる要素がすでにあるのではないかと。

柏井　そういう情報を組織化するだけの機能を先行することが必要ですね。

小泉　そのあたりが難しいところですね。しかし情報を考える時、現在のように通信技術が発達すると、その情報の管理中核機能は既成の都市でなくてもかなわない。ところが現実には都市に情報と人口が集中している。なぜかという、たとえば大阪に行けば、電話で得るものより、より早い、より高度な多量の情報が手に入るからなのです。これは人の集積の密度の差でしょうね。東

小泉　明石架橋が完成し、淡路空港ができると神戸は交通の要所となりうる。そこに出入りする情報をキャッチする能力は神戸には伝統的にあるから、食物にせよファッションにせよモダンな研究所をつくり、また特色ある図書館などの文化施設をつくってまったく神戸独自の新

しい文化を創造しうるのではないだろうか。レジャーにしてもモノコ以上の健全なものが神戸の立地を生かしてつくられると、人口集中の相乗効果、累積効果は大きいものとなる。

**柏井** 広い意味で情報が東京、大阪に集中するのは現状ですが、西日本経済、日本経済の中での特殊な担い手としての神戸は考えられるでしょうね。

**小泉** その場合、どこの部分を担うかを方向づけできる人は、先見の明がある人ですよ。そういう人達が集まってこれから議論するのが必要なことだと思っているのです。それに対する下働きとしてなら、ビジョン委員会にしても企画委員会にしてもお役に立てると思っています。条件整備と関連して都市再開発を考えると、建設中のポートアイランドは大きな要素になる。それに比べ旧市内での再開発をいかにするかは、神戸市に確固としたプランがあるとは聞いていない。これに対して市民が共同の場で関心と知恵を向けて行く、ということが必要です。

★商業・流通センター・観光・教育で神戸の方向づけを

**柏井** 神戸の旧市内では開港以来マツチ工業が盛んだったが、今では姫路、網干に工場ができています。それでも日本の85%を兵庫県で抑えている。それに附随して兵庫長田地区でゴム工業が発達した。このゴム履物工業が流行では日本で最先端で、最近のケミカルシューズのニューファッションは神戸からです。神戸で行なわれる第二回の見本市が情報を提供している。となるとこういう産業が神戸にあるから人が集まるのか、むしろマツチ工業のように東播、西播に出て行った方がいいのか、どうでしょうかね。

**小泉** 今まで神戸経済の地盤沈下とよくいわれてきましたが、これは神戸の生産高、出荷高の伸び率が六大都市の中で低いとか、あるいは日本のGNPにおける比率が低下しているという理由で考えると、これを上げようとなると工業化をせざるを得ない。しかし現実には神戸の市

域を考えるとこれは限界がある。一人当りの付加価値の大きいのは大工業しかないのですね。これを神戸に持つてくることはできない。となると何を指標にするかといえば、市民の平均所得が上がって行く方向、これを指標にするのです。このためには神戸の立地にあった特殊の二次と、三次、四次産業を神戸に持つてくるのが、日本の将来の産業構造の特殊な担い手となりうる。そう考えますと、さきほどもいいましたように商業、流通センター、観光、教育への条件整備の方が適切ではないかという感じがするのですがね。このためにどういう施設を先行投資させるのか、通信、交通をどういう風に整備したらいいのか、ということをも市民の中でいろいろ討議してもらおう機会を多くすることが必要なですね。

いわゆるビジョンというのは固定して考えるべきではないと思うのです。世界情勢も国内情勢が刻々と変化している現在、ビジョンを長期計画として固定して考えることはむしろ弊害を生みます。ただ考える条件なり想定といったものの一つの素案を常に市民が持っていて、それを年々の状況変化にトレースしながら再検討して行くというためのものがビジョンだと思うのです。ビジョンが生みだされた時、それをフォローアップすることが非常に重要になってくるのではないか。これを続けると、こういうことに関心のある人に、フォーマルにもインフォーマルにも参画していただくというムードを市の中にあるいは市民の中につくれば、それがビジョンにつながる。年々のビジョンに対するフォローアップが、市の行政、県の行政、国の行政に反映していくための、市民との直接的なオリエンテーションが必要になってくる。これによってビジョン的考え方が、財界ベースでなく市民的ベースになるのではないでしょうかね。

△オリエンタルホテルにて▽